岩木川の改修事業の歴史

明治43年12月	岩木川改修期成同盟会が発足
明治44年	岩木川が国直轄改修河川となる
大正6年9月	岩木川改修計画策定 ・岩木川改修工事着手のために検討。 ・大正2年6月洪水の上流各雨量観測所及び五所川原水位観測所の実測資料より、基準地点の計画高水流量を求め、流量配分を決定。 ・五所川原地点1,580㎥／s（計画高水流量）
大正7年12月	内務省岩木川改修事務所開設 ・国直轄による本格的な改修事業開始
大正10年9月	岩木川改修起工式挙行 ・数々の催しがあり、五所川原町は空前の大賑わいであったといわれている。改修工事に寄せる住民の関心と期待が大きかった。
大正15年5月	十三湖水戸口突堤建設着手（昭和22年完成） ・下流部の広域に発生していた河口閉塞による水位上昇・排水不良等の被害が解消。 ・完成後、閉塞による浸水被害は一度も発生していない。 ・地域を苦しめた度重なる水戸口閉塞による浸水被害を解消し、岩木川の治水と津軽平野の発展の礎となった貴重な土木遺産として、平成28年9月には土木学会選奨土木遺産に認定。
昭和5年	十川改修着手（昭和11年完成）
昭和10年	沖浦ダム建設着手（昭和20年完成、昭和63年用途廃止）
昭和11年6月	岩木川第一次改修計画策定 ・昭和10年8月洪水を対象に計画流量の再検討を実施。 ・五所川原地点2,400㎥／s（計画高水流量） 旧十川改修着手（昭和30年竣工県引き渡し）
昭和21年	十三湖右岸囲繞堤着手（昭和30年完成）
昭和28年8月	岩木川第二次改修計画策定 ・昭和10年8月洪水を対象に目屋ダムの洪水調節等の検討を実施。 ・五所川原地点2,000㎥／s（計画高水流量）（目屋ダムの調節効果400㎥／s） 目屋ダム着工（昭和35年完成、平成27年用途廃止）
昭和30年	十三湖左岸囲繞堤着手（昭和36年完成）
昭和35年2月	岩木川第三次改修計画策定 ・昭和33年8月洪水を対象に、上流部の流量配分を変更。 ・五所川原地点2,000㎥／s（計画高水流量）
昭和41年3月	岩木川一級河川指定 工事実施基本計画策定 ・五所川原地点2,000㎥／s（計画高水流量）
昭和44年	飯詰ダム建設採択（昭和48年完成）
昭和48年 3月	浅瀬石川ダム建設着工（昭和63年完成） 工事実施基本計画（第一次改訂） ・頻発した出水や河川流域の開発状況等を考慮し、治水計画を全面的に改定。 ・上流ダム群を計画（浅瀬石川ダム、津軽ダム）。 ・五所川原地点3,800㎥／s（計画高水流量）
昭和52年	激甚災害対策特別緊急事業（～昭和54年） 岩木川緊急施工計画策定
昭和54年	緊急施工計画（～平成4年） ・武田、五所川原、車力、下繁田、稲垣、木造地区の堤防完成 ・五所川原市の治水安全度 土淵川放水路着手（昭和57年完成）
昭和55年	久吉ダム建設採択（平成6年完成）
昭和63年3月	工事実施基本計画（第二次改訂） ・計画高水位、計画横断計についての部分改訂。
平成3年	津軽ダム建設着手（平成28年完成）
平成6年6月	工事実施基本計画（第三次改訂） ・ダム名等の記載に関わる部分改訂
平成8年	岩木川中流部（五所川原基準地点から三川合流点）区間の河道掘削及び無堤地区の解消に着手
平成12年7月	岩木川流域懇談会開催（平成12年～）
平成17年5月	岩木川水系河川整備方針策定 ・河川の専門家が実施する河川整備について、長期的な観点から、科学的・客観的に定める基本的な方針。 ・計画高水流量3,800㎥／s。
平成18年3月	岩木川水系河川整備計画策定 ・平成17年の整備基本方針を踏まえ、岩木川流域住民の意見を広く聴きながら、当面30年の整備計画を策定。 ・整備計画流量2,500㎥／s。
平成20年	幡龍橋周辺の三世寺（青女子地区）の堤防完成
平成24年	板柳地区の堤防完成 鶴田左岸地区の引堤に着手
平成25年	上中畑地区の堤防完成
平成26年	中流部河道掘削着手（平成25年9月洪水対応の河道整備）
平成27年	鶴田左岸地区 保安橋改築着手
平成28年5月	岩木川大規模水害に備えた減災対策協議会設立
平成29年3月 11月	大川・三世寺地区築堤完成 ・岩木川無堤区間が全て解消（十三湖除く） 鶴田右岸地区の引堤着手

※現在、整備計画に基づき、河道整備を実施中。

代表的な洪水被害

昭和10年8月	・低気圧 ・平川右岸（藤崎地区）で破堤、岩木川左岸（新和地区）で越水。
昭和33年8月	・前線
昭和33年9月	・台風　・死者行方不明者13名 ・床下浸水9,822戸、床上浸水4,197戸
昭和35年8月	・低気圧　・死者行方不明者17名 ・床下浸水7,344戸、床上浸水4,016戸
昭和47年7月	・前線 ・床下浸水485戸、床上浸水117戸
昭和50年8月	・前線　・死者行方不明者1名 ・床下浸水4,847戸、床上浸水3,824戸
昭和52年8月	・低気圧　・死者行方不明者11名 ・床下浸水6,003戸、床上浸水2,492戸
昭和56年8月	・台風 ・床下浸水1,140戸、床上浸水240戸
平成2年9月	・台風 ・床下浸水588戸、床上浸水93戸
平成9年5月	・融雪出水
平成14年8月	・台風 ・床下浸水9戸、床上浸水7戸
平成16年8月	・台風 ・床下浸水1戸、床上浸水18戸
平成25年9月	・台風 ・床下浸水67戸、床上浸水21戸

岩木川改修100周年記念事業実行委員会

事務局

五所川原市役所 建設部 土木課　〒037-8686 五所川原市布屋町41-1　TEL:0173-35-2111（代表）　http://www.city.goshogawara.lg.jp/

国土交通省 東北地方整備局 青森河川国道事務所 調査第一課　〒030-0822 青森市中央三丁目20-38　TEL:017-734-4560（直通）　http://www.thr.mlit.go.jp/aomori/

※本事業は、（一社）東北地域づくり協会みちのく国づくり支援事業の支援により実施しています。

資料－2

岩木川とともに一世紀。

平成30年 100周年 岩木川改修事業

平成30年

岩木川改修 100周年記念 事業記録誌

岩木川改修100周年記念事業実行委員会

発刊にあたって

五所川原市長
佐々木孝昌

記念誌発刊のごあいさつ

岩木川の治水事業が100周年という大きな節目を迎え、ここに記念誌が発刊されますことに、心からお祝い申し上げます。

国土交通省をはじめ岩木川流域市町村長の皆様の御協力のもと、平成30年12月1日に、岩木川改修100周年記念シンポジウムを五所川原市で開催することができました。市民の皆様をはじめ関係各位の多数の御出席を賜り、盛大に挙行できましたことを、この場をお借りしまして、深く感謝申し上げます。

津軽平野を南北に悠々と流れる岩木川は、青森県最大の一級河川であり、「母なる川」として、流域に限りない恵みを与え、歴史と文化を育んできました。
それと同時に、ひとたび豪雨となればたちまち氾濫し、多大な被害をもたらしてきた「暴れ川」でもありました。

大正7年に国直轄事業として本格的に治水事業が始まり、この100年の間、十三湖の水戸口突堤や築堤工事、さらには浅瀬石川ダム、津軽ダムの完成など、数々の治水対策により、洪水などの被害は大きく解消されております。

今日、岩木川が流域に安全・安心と豊かな恵みをもたらし、地域の人々に愛され、親しまれておりますのも、先人の弛まぬ努力、そして、その努力が後世に継承されてきたからこそであり、改めまして先人が築き上げてきた功績に感謝するとともに、治水対策の重要性を再認識しております。

改修100周年を契機として、関係機関が一丸となって、岩木川流域の更なる発展に向け取り組んでまいりたいと存じますので、皆様の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げまして、挨拶といたします。

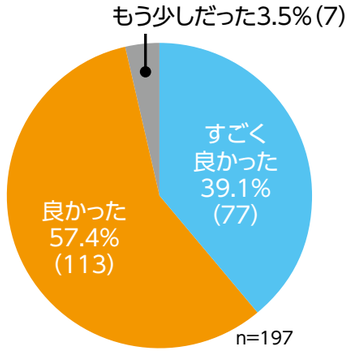
岩木川改修100周年記念事業実行委員会 委員

会長　五所川原市長	平山（ひらやま） 誠敏（まさとし）	(～H30.7.8)
会長　五所川原市長	佐々木（ささき） 孝昌（たかまさ）	(H30.7.9～)
副会長　弘前市長	葛西（かさい） 憲之（のりゆき）	(～H30.4.15)
副会長　弘前市長	櫻田（さくらだ） 宏（ひろし）	(H30.4.16～)
副会長　黒石市長	髙樋（たかひ） 憲（けん）	
平川市長	長尾（ながお） 忠行（ただゆき）	
中泊町長	濱舘（はまだて） 豊光（とよみつ）	
西目屋村長	関（せき） 和典（かずのり）	
つがる市長	福島（ふくしま） 弘芳（ひろよし）	
鶴田町長	相川（あいかわ） 正光（まさみつ）	
青森市長	小野寺（おのでら） 晃彦（あきひこ）	
板柳町長	成田（なりた） 誠（まこと）	
藤崎町長	平田（ひらた） 博幸（ひろゆき）	
大鰐町長	山田（やまだ） 年伸（としのぶ）	
鰺ヶ沢町長	平田（ひらた） 衛（まもる）	
深浦町長	吉田（よしだ） 満（みつる）	
田舎館村長	鈴木（すずき） 孝雄（こうゆう）	
青森県県土整備部 部長	浅利（あさり） 次郎（じろう）	(～H30.3.31)
青森県県土整備部 部長	福士（ふくし） 祐治（ゆうじ）	(H30.4.1～)
(一社)東北地域づくり協会 専務理事	三浦（みうら） 清志（きよし）	
国土交通省東北地方整備局 青森河川国道事務所 所長	佐近（さこん） 裕之（ひろゆき）	(～H30.6.30)
国土交通省東北地方整備局 青森河川国道事務所 所長	巖倉（いわくら） 啓子（けいこ）	(H30.7.1～)
国土交通省東北地方整備局 岩木川ダム統合管理事務所 所長	栗田（くりた） 信博（のぶひろ）	

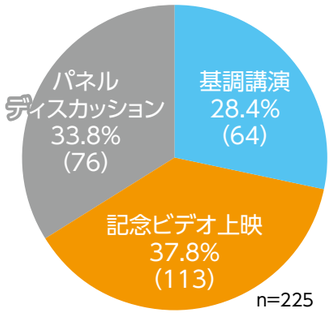
アンケート集計結果

来場者数 400名 ／ 回答者数 207名
(複数回答・項目無回答有り)

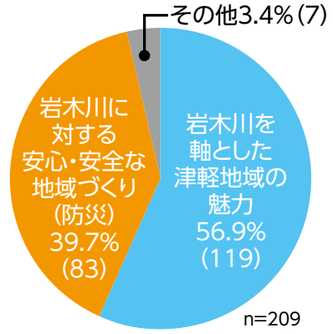
Q1 今回のシンポジウムはいかがでしたか？



Q2 全体のプログラムで一番印象に残ったものは？



Q3 今回のパネルディスカッションでどんな内容に深く興味を持ちましたか？



Q4 100年後の岩木川に期待すること。自分の取り組みとして行いたいことがあれば自由にお書き下さい。

自分の取り組みとして行いたいこと

■防災に関する事務 ■周知に関する事務で貢献していきたい ■河川環境の改善・保全と防災・治水のバランスを考えたい ■安全で魅力的な岩木川 ■防災を意識して生活していきたい ■岩木川にゴミをすてないとか、そういう事しか出来ませんが気をつけて行きたい ■ゴミ拾い ■自然環境を変わらず保全 ■きれいな川 ■ゴミのないきれいな川を維持していきたい ■生物の生活基盤を改善しつつ、共存できる(利用できる資源を掘り出して)将来にしていきたい ■水を汚すことなく、今後も見守って行きたい ■多目的広場的な河川敷を増やしたい

100年後の岩木川に期待すること

■災害が起きないようなインフラ整備 ■平川上流にもダムを造るべき! ■防災上、堤防の再点検と再整備等に取り組んでいただきたい。■地域住民が安心して暮らせる河川 ■河口部の安定 ■防災を期待 ■安全な堤防強化 ■維持管理に万全 ■岩木川の治水をして、さらに地域の活性化 ■早めの改修を ■対策をしっかりと行う事 ■災害ゼロ ■これからも治水整備の発展 ■水害災害のない河川整備 ■皆が住みやすい環境を作ってももらいたい ■鮎の大群にめぐり合うことの出来る水質 ■いつまでも美しく、安心の生活

来場者プロフィール

年齢	■19才以下…5.3% ■20～29才…5.3% ■30～39才…8.7% ■40～49才…18.4% ■50～59才…27.1% ■60才以上…35.3%
性別	■男性…92.3% ■女性…7.7%
職業	■学生…4.9% ■行政…23.5% ■大学・高校等関係者…2.0% ■農業関係…5.9% ■漁業関係…1.0% ■コンサルタント…30.4% ■建設業…20.1% ■その他…12.3%

実行委員会メンバーとシンポジウム出演者の記念撮影(平成30年12月1日)

のですが、現実的にはそれが間に合いませんでした。山陽新聞のアンケートで過去の水害について知っていたけれども何も備えていなかったのが7割近く。知ってもおらず、備えもしていなかったのが16%、つまり8割以上の方が結局水害に対する備えをしていなかったということになります。やはり住民の方一人ひとりが、自分がお住いの場所がどんな場所であるかを知っていただくことが全ての基本だと私は思っております。ハザードマップを見ると、岩木川の中でも浸水想定で非常に浸水深が高くなるのは、この五所川原のエリアという結果が出ております。やはり危険な場所に住んでおられる方には普段から備えていただきたいと思います。同様に土砂災害警戒区域の中にお住まいの方々には、早めの避難を心掛けていただくことをお願いしたいと思います。地球温暖化が進んだ時、東北地方の降雨は強大化することが予想されております。洪水を防ぐ治水投資の一層の推進は必要ですし、それと合わせてソフト対策としてハザードマップの周知、迅速な避難、水防活動、それから水害リスクを踏まえた土地利用。これを進めていくことが重要だと思っております。

小山内：私ども青森県防災士会は、防災の必要性を市民の皆さんと一緒になって考えていく会です。垣根を越えた関係づくりを目指して、自主防災組織や色々な組織、団体と連携をしております。災害に負けない地域を目指して、自助・共助・公助を連携して実践していくことが必要です。地域にある施設や、資源や人材を活用して、みんなで防災力を高めていただきたいと考えております。

今後の岩木川へ向けて

石鉢：最後にまとめとして、岩木川の今後の100年、また未来の子どもたちに継承するために必要なことですとか、今後の活動、ご感想などをお願いいたします。

東：今後東北でも大雨が降る可能性があるので、河川整備を進めていかなければなりませんが、それをただ単にやったのでは、環境の方はどうなるのだという異論も出てきます。そこを一緒に議論をしながら、50年後、100年後の未来像を議論しながら、河川整備とか、地域づくりとか、地域連携についての意見をぶつけあう場がもっと必要なのではないかと思います。

鹿田：今回あらためて岩木川というものを考える機会になりました。日本海に注ぐまでに様々な岩木川の表情があって、流域の様々な暮らし、物語があるということに本当に改めて気付かされました。観光というのは外からくるお客さんだけのものではなく、ここに暮らす人たちに向けた、そういう気付きや新たな発見を求めるツアーなどを今後作ってみたいと思いました。

福士：壮大な夢物語かもしれませんが、五所川原市が岩木川から

の船を使っての物流で栄えたという歴史的背景もありますので、もし可能であれば岩木川がもっと広くなって、外国のお客さんが直接世界から豪華客船で来て、船着き場ができて来れば、そこに色々物流の施設もできます。中央にある大きな会社なども誘致して、直に輸出とかもできれば、100年後、200年後になるかもしれませんが、この地域も岩木川を使って潤うということができればいいかなと思います。

小山内：万が一災害が生じた場合は、いち早く自分の判断で避難をしていただき、自分の命を守っていただきたいと思います。ハザードマップも自主防災組織があるところはすでに作っているかと思いますが、子どもの通学路等を1年に1回はチェックしていただいて、もしそこに障害のある方がいらっしゃるようでしたら、何とかその方を防災訓練に参加してもらえるような方法を相談する等していただきたいと思います。実際に防災訓練で体験されたことは体が覚えております。自然に手足が動くものですから、ぜひ皆さんの地域でお願いしたいと思います。

石鉢：最後に全体の議論を通しての印象、コメント等を佐々木先生お願いいたします。

佐々木：川には生き物もいるし、我々の心を癒す風景もいっぱいあります。そういう部分はどんどん利用して、川を中心にして地域づくりを進めていくことが、我々の子ども、そのお孫さん方が継いでくれる川になるのではないだろうかと思います。同時に、大雨の時にはやっぱ大蛇が暴れたようになるわけですから、それに命を奪われない、田畑が壊されないような治水事業も進めていくこと。あるいはそういう大雨の時は、一時は身を引いて、とにかく命だけは助かるような方策も考えていくということが重要なのではないだろうかなと思いました。

活動の記録

2016年 9月16日	**土木学会選奨土木遺産に認定** 完成から70年一度も閉塞することなくその機能を維持。岩木川の治水と津軽平野の発展の礎となる。
2017年 1月13日	**十三湖水戸口突堤選奨土木遺産認定記念式典 開催** 土木学会東北支部長 東北地方整備局 川瀧弘之局長より、推薦者である佐々木幹夫氏（八戸工業大学大学院 教授）へ認定書が、五所川原市 平山誠敏市長へ銘板がそれぞれ授与。
2017年 7月 3日	**岩木川改修100周年記念事業実行委員会設立総会開催**
2017年10月30日	**第1回 岩木川改修100周年記念事業実行委員会 開催** プレイベントとして11月25日に五所川原市「中の島プリッジパーク入り口緑地（五所川原市十三）」における『十三湖水戸口突堤選奨土木遺産記念プレート（石碑）除幕式』の開催など、H29年度及びH30年度の記念事業計画（案）等について、承認された。
2017年11月22日	**記念プレートへメッセージ付津軽金山焼陶器を貼り付け 開催** 主催事業 地元の五所川原市立市浦小学校の児童65名が取り付けを行った。
2017年11月25日	**十三湖水戸口突堤選奨土木遺産認定記念プレート除幕式 開催** 主催事業 除幕式では同事業実行委員会会長である五所川原市平山市長をはじめ地元関係者など約30名が出席し、記念プレートをお披露目した。
2018年 4月21日	**岩木川下流ヨシ原の火入れ（地域伝統の復活火入れ）** 共催事業 地域の団体や行政機関からなる「岩木川下流ヨシ原の火入れ検討会」が、環境の保全のため、岩木川改修100周年を契機にヨシ原の火入れの復活に向け実験を行った。
2018年 5月10日～	**巡回パネル展 5月10日～11月18日** 主催事業
2018年 5月22日	**第2回 岩木川改修100周年記念事業実行委員会 開催** 8月4日(土)『岩木川改修100周年記念式典改修記念碑（復元）除幕式』の開催、12月1日(土)「五所川原市ふるさと交流圏民センター（オルテンシア）」において『岩木川改修100周年記念シンポジウム』の開催、パネル展や懸垂幕の掲示等の広報活動など、H30年度の記念事業計画（案）等について、承認された。
2018年 6月15日～11月26日	**岩木川クリーンアップ大作戦** 協力事業
2018年 8月 4日	**岩木川改修100周年 記念碑除幕式 開催** 五所川原出張所構内において、関係者約80名が出席し、復元した岩木川改修記念碑の除幕式を開催した。
2018年 8月 4日	**あおもりの川を愛する会 河川技術講演会** 協力事業
2018年 8月4日～12月2日	**流域沿川市町村夏まつり等での広報・宣伝** 協力事業
2018年 8月 8日	**水資源環境フォーラム** 協力事業
2018年 8月29日 2018年 8月31日	**岩木川船上合同巡視 8月29日(水)上流地区、31日（金）下流地区** 主催事業 8月29日(水)上流地区、31日（金）下流地区において、船上巡視（3艇）を行った。巡視には平田藤崎町長、成田板柳町長、相川鶴田町長、河川協力団体、防災エキスパート、報道の方にも乗船していただき視察を行った。
2018年 9月15日	**津軽白神湖まつり** 協力事業
2018年10月 2日	**第3回 岩木川改修100周年記念事業実行委員会 開催** これまでの各種記念事業の実施状況の報告と確認、そして地域の宝である岩木川を未来へ継承し未来へ発信するために開催予定の『岩木川改修100周年記念シンポジウム』の効果的な実施内容等について、審議を行った。
2018年10月11日	**浅瀬石川ダム管理30周年記念シンポジウム 開催** 共催事業
2018年10月14日	**岩木川改修100周年記念ウォーキングin五所川原 開催** 協力事業
2018年12月 1日	**岩木川改修100周年記念事業 岩木川シンポジウム 開催** 主催事業 地域の宝である岩木川を未来へ継承し、未来へ発信するために何が必要かを考えるシンポジウムを開催。八戸工業大学大学院佐々木教授による基調講演や岩木川改修100周年記念ビデオ上映、パネルディスカッションなどを行い、当日は約400名（満席）が聴講。
2019年 2月25日	**第4回 岩木川改修100周年記念事業実行委員会 開催**

岩木川下流ヨシ原の火入れ

岩木川クリーンアップ大作戦

岩木川改修100周年記念碑除幕式

水資源環境フォーラム

岩木川船上合同巡視

津軽白神湖まつり

岩木川改修100周年記念ウォーキング in五所川原

岩木川改修100周年記念事業

十三湖水戸口突堤選奨土木遺産記念プレート除幕式（99周年プレイベント）2017年11月25日 主催

岩木川改修100周年記念事業として2016年9月16日に土木学会選奨土木遺産に認定された十三湖水戸口突堤の『記念プレート除幕式』が五所川原市の中の島ブリッジパーク入り口緑地で執り行いました。

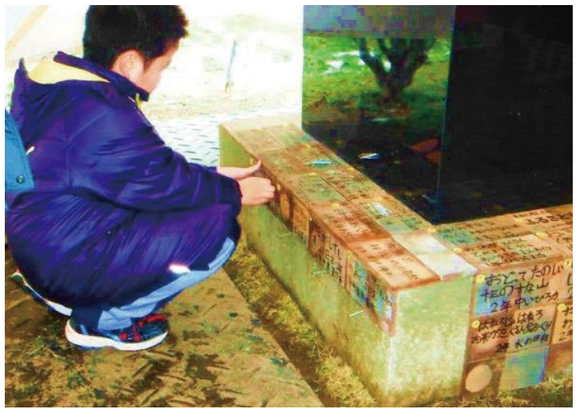
除幕式には同事業実行委員会会長である五所川原市平山市長をはじめ地元関係者など約30名が出席し、記念プレートをお披露目しました。

なお、除幕式に先立ち行ったプレイベント（22日）では、次世代を担う、地元の五所川原市立市浦小学校の児童65名が、記念プレートへメッセージが描かれた津軽金山焼陶器の貼り付けを行いました。

お披露目された記念プレート

出席者による記念プレートの除幕

～オープニングアトラクション～　相内の虫送り囃子（相内青年団の皆様）


五所川原市立市浦小学校の児童による津軽金山焼陶器の貼り付け

り、あるいはデコイ（模型）を置いています。それに加えて、冬に田んぼを作らない時期にも水を入れて湿地を作ってやる「ふゆみずたんぼ」、冬小麦を作っているエリアで小麦の刈り取った後に水を入れて、湿地を作ってやる「なつみずたんぼ」の取り組みも行っています。東北地方はもともと、タンチョウ、トキ、コウノトリなどが散発的に来ておりますし、そもそもガン類の大規模な越冬地が宮城県にあります。その生息環境を整備し、管理することでより増やし、その恩恵、おこぼれをもらいたいということでございます。こういった生態系ネットワークの取り組みを進めることによって、ある意味日本を引っ張っていくような形で、例えばブランド化、あるいはより新しい観光ルートの構築を進めていきたいと思っております。

石鉢：川のそばに住んでいると、どうしても氾濫という災害のリスクがあります。今年も各地で河川の大きな災害が相次ぎました。岩木川に対する安心、安全な地域づくりということで進めていきたいと思います。

安心安全な地域づくりについて

■日本各地で大きな洪水被害が頻発

高村：7月に非常に大きな雨が西日本で降りました。特に長い時間降り続ける雨量が、各地で記録を更新しました。224名の方が亡くなり、8名の方が未だ行方不明という、平成になって以降、最大の被害が出てしまいました。特に岡山県の倉敷市を流れる小田川の破堤が大きな被害を出しました。倉敷市の真備地区では5メートル以上の浸水深で、2階建ての天井まで水が来たということになります。実は2年前にハザードマップを作成しており、薄紫で色が付けてあるところは、想定浸水深5メートル以上ということで、ある意味ハザードマップ通りに浸水が起こったということでございます。東北地方でも、毎年のように浸水被害が起こっております。平成27年は宮城県、平成28年は岩手県の小本川で、この時老人福祉施設で9名の方が亡くなっております。そして29年には秋田県で被害がありました。さらに今年は山形県の最上川で出水がございました。24時間雨量は366ミリで、200戸以上の浸水被害が発生しました。戸沢村役場があるところの24時間雨量の記録で、この43年間でこれまでの最大が平成2年の198ミリに対し、今年の雨量は366ミリ。西日本水害で広島の志和観測所の記録が24時間334ミリという雨でございましたから、西日本水害以上の雨が降ったということでございます。この時の我々防災担当者として厳しかったところは、気象台の予想よりもはるかに多い、いわゆる線状降水帯の雨というのは、あらかじめ予測するのは難しいということが、これからも言えるのかなと思っております。

石鉢：実際に災害が起きた場合、被災した時の心構え等について、現場で数多く活動されている小山内さんからご紹介お願いいたします。

■災害時に備えた心の準備

小山内：災害は避けられないので、特に忘れた頃にやってくるという言葉が、今の時代はもう忘れる前に次々と繰り返されているのが現状です。災害ボランティアの元年が、阪神・淡路大震災のあった1月17日になっております。災害ボランティアセンターを立ち上げて、活動するわけですが、住民の方のニーズとボランティアの人たちをくっつけるという作業がなかなか大変です。活動をする人たちと、きちんと打ち合わせをしてやらないと、家の後片付けもままならない状況が続きます。防災士一人ひとりが、自分の役割を担って活動するわけなのですが、全国の仲間や近隣の方々に協力してもらいながら、共助の精神で活動を続けております。兵庫にある舞子高校の災害ボランティア科ではビラを作ってくれました。また、若い大学生、高校生たちが、子どもたちのために色んなイベントを企画してくれました。ひとりでボランティアというのもいいのですが、仲間を誘ってやるというところも大切です。家族全員で避難場所を知っておくことも大変大事ですし、自分で自分のリュックを準備しておくというのも大切です。もし災害が起きたら、自分には何ができるかということを考えていただきたいと思います。

石鉢：実際に災害が起こった場合、いかに被害を少なくするか流域の安全、安心な地域づくりの取り組みについてお願いいたします。

■安全・安心な地域づくりの取組み

高村：倉敷の浸水でも、国土交通省は小田川合流点の付け替え事業を進めておりました。この秋から工事に着手する段階だった

ザイナーのコシノジュンコ先生のご推挙で、日本とブラジルの交流120周年を記念した時です。ブラジル史上、国外の山車を入れたのは初めてと聞いております。サンバカーニバルの山車自体も大きなもので、しかもサンバの音楽やダンサーが、ねぶた祭りにおける太鼓、笛、鐘のはやし方や、跳人や参加者とすごく似ており、かなりの反響をいただきました。また10月にパリで行われたジャポニズムというイベントに参加し、レセプションでねぶたの顔を描きました。やはり外国や県外の方など製作過程を見る機会のないお客様にとっては、こういう実演はとても好まれます。パリに持って行った立佞武多は高さ12メートルぐらいと通常の半分程度なのですが、それでも初めて見たお客様にはすごく大きく見えたようで、会場の入り口付近に一番メインの山車として置かせてもらいました。皆さん写真やInstagramやらに載せていただいて、かなりの手ごたえを感じました。このように立佞武多は世界のあちこちに呼ばれていますが、作り手が3名しかおらず、技術の継承が心配されます。そこで、五所川原市では、五所川原農林高校と五所川原高校の2校の生徒たちの手で立佞武多を作るということを続けています。我々立佞武多製作者も高校に行って、製作の手伝いをしており、この子たちの中から、我々の次にねぶたを作ってくれる人がひとりでも出てくれれば、ずっとこの祭りが続けていけるのではないかと思っています。

石鉢：八戸三社大祭など青森県の山車文化は大きな観光の魅力になりますし、世界へのアピールという点でも進んでいると思いますが、後継者をどう育てていくかが課題としてあります。続いて岩木川と流域の自然とどう共存していくかについて、東先生お願いします。

■生態系の保護と河川整備の両立

東：世界的には、今後のインフラ整備の中でグリーンのインフラ整備が必要だという考え方が問われかけています。我々の岩木川流域では、その一歩手前の生態系ネットワークを考えようと進めています。現在の生態系は、バランスが崩れてしまった生態系です。地球の上の生物は5回大絶滅を経験しており、最後は恐竜が絶滅した時です。今はそれと同じレベルの大絶滅が進行中で、バランスが崩れるということは、希少種がいなくなるだけではなくいろんなことが問題になってきます。希少種は確かに守りたいと思いますが、それよりも大事なのは、いろいろな生き物がたくさんいる生態系なのではないかと思います。そして津軽地方はそういう可能性のある場所であり、もっと良くなる可能性があるのではないかと思っています。「岩木川魚がすみやすい川づくり」は、私も参加している国土交通省の事業です。これは希少種を守ろうというのではなく、アユ・ウグイ・カジカなど、子どもの頃捕まえたりしていた魚たちを増やそうということです。一方でそれらの魚が減った原因になった、堰などの川の形や流れに手を加えるということを、まだ実験段階ですが始めています。ポテンシャルを上げるということで、水域や樹林帯のつながりが、生き物にとってはプラスになることは間違いありません。津軽地方はまだまだそういうものが残っています。上手に共存する方向の地域づくりができたらいいなと思っています。また、かつては伝統的にヨシを利用するために火入れ、刈り取りがヨシ原全体でやられていたのですが、ヨシの利用が減ってしまい担い手が減りました。それでヨシ原を放置すると、やはり植生が変わります。それを避けるために、伝統的な作業を復活させる必要があるだろう思います。

石鉢：最近は河川整備の中でも、川周辺の自然を残して、どう生かしていくかという視点が大事にされているように思います。全国の河川での自然との共存に向けた事例について、高村部長さんからご紹介いただきたいと思います。

■生態系ネットワークによる地域振興

高村：生態系ネットワークの大切さについてお話がありましたが、我々としてはそれを守りつつ、その生態系を守ったことの成果を経済ですとか、地域活性化に活かしたいということでございます。全国各地でコウノトリの定着を目指した動きがございます。これは福井県の越前市の取り組みですが、繁殖して放すと当然、生息する場所が必要になります。これを河川事業で取り組み、高水敷を切り下げることによって、湿地を作り出しました。それでコウノトリの生息地を生み出したという例でございます。コウノトリが来ることによって、地域の農業でも低農薬の特別栽培米を作り、それをブランド化したということで、それが高い値段で売れるという経済性でございます。関東にも渡良瀬遊水地という大きなラムサール湿地がございますので、千葉県の野田市が利根川等を使った自然再生とコウノトリの復活というのを目指しています。栃木県の小山市でも、人口の巣を作れるような塔を作

岩木川改修100周年 記念碑除幕式

2018年8月4日 主催

青森河川国道事務所五所川原出張所構内において、岩木川改修100周年記念事業実行委員会委員、八戸工業大学大学院佐々木教授や地元小学生など、関係者約80名が出席し、復元した『記念碑』の除幕式を執り行いました。この記念碑は、岩木川改修期成同盟会（明治43年設立）が、改修事業着手を記念し、大正10年9月の起工式において、五所川原市役所構内に建立されたものの、移設や損傷により一時、五所川原市が保管していたものを、岩木川改修100周年という節目に、岩木川の水害の歴史を後世に伝え、岩木川の未来を地域とともに考えるきっかけとして修復・復元したものです。

出席者による復元した記念碑の除幕

復元した岩木川改修記念碑

さきの内務大臣にして、正三位勲一等男爵の後藤新平がこの表題を揮毫した。

岩木川は津軽の大河であり、美田三万以上もの灌漑に役立ってきた。しかしながらその水害も大きく、弘前藩は時に防備を周到におこない、その害をやや緩めることに成功してきた。

維新後は青森県の事業として、これに当たってきたが弘前藩時代のようには行かず、森林の荒廃は進み、そうしたときに水枯れなども起きていたのである

水害が頻発し地方が次第に苦しくなるに至って明治十三年か十四年の頃、大隈（重信）参議が十三湖の湖口を視察しにきた。また内務省の技師も、寝ることも行くこともせず調査に没頭し、ついに帝国議会に請願の建白を行う道が大きく開けたのである（ただしこの際の調査ではその設計工費は県の予算では賄うことができない額となり、着工は実現しなかった）。

この地方の志士たちは一躍奮起して、明治四十三年、青森県議会が、岩木川改修工事を国費をもって進めるよう内務大臣あてに請願することを建議した。

そのいきさつが記された明治四十四年の複建書（建白に対する返答）によれば、当初（明治十三～四年頃）は国費ではなく県費にて工費を補い、町村長もこれを拒むことができなかった。また、帝国議会への請願も、その後毎年提出しなければならず、その都度許可を得なければならないことが決まって、地元の望む国費による長期計画としては採択されなかった

その年、有志が相談して「岩木川改修期成同盟会」を設立し、必要な嘆願運動を行い、ついに県当局も、担当官や技師を派遣するなどの案がほぼ成立するにいたった。

同盟会の熱心な請願活動の結果、大正七年に岩木川改修工事は十カ年継続の国の直轄事業として認められたが、その年の帝国議会決議によれば、「岩木川改修工事費用七百万円」「起工後十年を竣工とする」「県の支払いは百八十三万五千円」などと決議されている。

翌年、臨時県議会においても県費負担のことが決定され、ついにこの地方にとって長年の望みが達せられた。すなわち工事開始から十年後には、永らく続いた財政負担から解放され、この地方の人々は生きることに楽しみを覚えるに至ったのである。実に、ありがたくめでたい御代の余沢が、骨髄にまで行き渡ったと云うべきであろう。

したがってこの地方の人々は、振り返ってみてこの大事業が誰の力によってなされたことか、忘れてはならないのである。

むろんこれは、上は中央内閣および地方の重要な地位の人々をはじめ、下は地方の志士や仁者に至るまで、多くの人々の尽力によるものである。彼らが互いに助け合い力を合わせながらも焦心、苦慮したうえで折衝を重ね、奔走した結果、ここに至ったのである。

ここに期成同盟発足の経緯を記して、今後の戒めとして、またこの事業の意味をもって様々に考えてくれることを期待して、謹んでそのあらましをここに刻んだ次第である。

大正十年九月十六日　陸奥五所川原　川村善八撰
弘　前　高山松堂書

記念碑の碑文（石碑に刻まれた文章を意訳）

来賓挨拶 八戸工業大学大学院 佐々木教授（岩木川河川整備委員会委員長）

～オープニングアトラクション～ 五所川原立佞武多囃子（ねぶた製作団体「漣」の皆様）

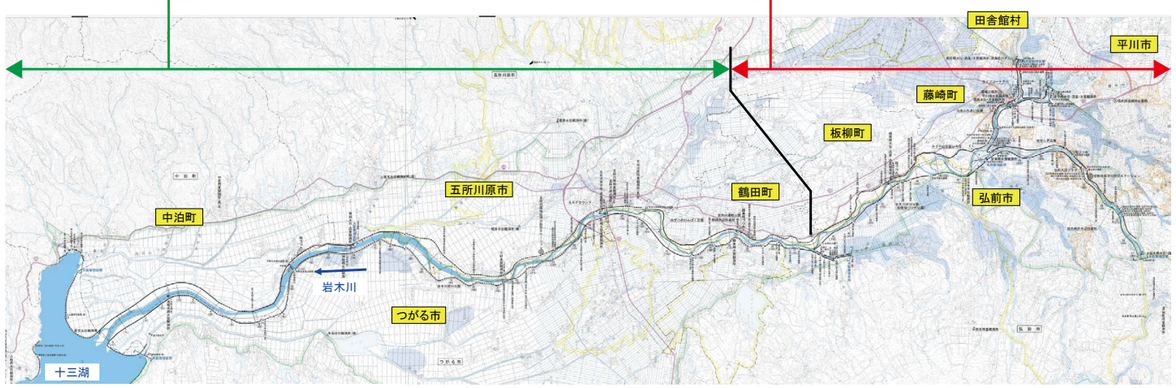
岩木川船上合同巡視

2018年8月29日・2018年8月31日 主催

8月29日・31日の2日間で、沿川首長や河川協力団体、マスコミ等約５０人が参加し、船上合同巡視を実施。3艇に分かれ、川の中から河岸の浸食、樹木等の繁茂状況等の確認、危険箇所等の点検、そして今後の岩木川のあり方・利活用のための調査・情報共有を行いました。

今回の巡視では、特に緊急に整備を要する危険箇所は無く、今後は必要に応じて整備を行い、一般の方にも利用していただけるよう環境・川づくりを進めていきます。

2日目 8月31日 下流区間：五所川原出張所管内　1日目 8月29日 上流区間：藤崎出張所管内



8月29日 第1区間 藤崎町長

8月29日 第2区間 板柳町長

8月31日 午前の部 鶴田町長

8月29日 マスコミ参加の様子

参加者のコメント

初めて川の中から岩木川を見せてもらい、津軽平野を潤している岩木川の恵みを強く感じました。川の大切さを真剣に考える良い機会を得たと思っています。

術やスケールの素晴らしさ」、「強」は「災害対応力、頑丈さ、管理システムの素晴らしさ」、そして「美」は「構造物自体の造形美、材質の美しさ、周辺環境と調和した景観」です。それに加えてお客さ

んが求めているのは、構造物が作り出されるに至った背景や歴史などの「物語」です。津軽ダムにくる方ですと、ダムカードを集めている方もいらっしゃいます。私ども3年前から津軽の普段を「FUKAGU−ASAGU」ツアーをやっています。津軽地域にある資源を、ちょっと風変わりな視点から味付けして、例えば忍者の謎に迫る町歩きですとか、弘南鉄道の車両の修理場、あるいは尾上地区の蔵の見学をしてひとつひとつの特徴を楽しむツアーというのを展開しております。

石鉢：観光の大きなコンテンツに祭りがあります。津軽では「ねぶた」「ねぷた」が代表になりますので、五所川原市で立佞武多の製作を手掛けておられます福士さんから、立佞武多の魅力、歴史、復活の際のご苦労等についてご紹介をお願いします。

■岩木川で復活した立佞武多

福士：青森県には津軽地方を中心にいろんな形態のねぶたがあるのですが、ねぶたが今の形になるまでには、七夕祭りや灯篭流しなど色々な祭りが変化し、そこに北前船を使って京都の文化が岩木川を上ってきて、いろんな影響を及ぼしたということです。岩木川が運んできた文化が、ねぶたにも大きく役立ってきたのではないかと思います。平成8年に立佞武多を復元した時ですが、五所川原市内は電線があり、23メートルの立佞武多を復元できて、なおかつ平らな場所というと岩木川の河川敷しかありませんでした。製作も全てが試行錯誤でした。実は平成8年にいきなり23メートルの立佞武多を復元したわけではありません。旧五所川原市の市制施行40周年の特別事業で、五所川原青年会議所さんが中心となってやった市民劇団「橇の音」がありました。この劇団で、五所川原市が水害などから不撓不屈の精神で復興を遂げたという場面を会場で演出するために、大体7メートルぐらいの立佞武多を作りました。それがあったので、平成8年に岩木川で本物の大きい立佞武多を復元しようということになったわけです。岩木川を伝ってねぶたという文化が、弘前、五所川原に流れたということ、そして今の五所川原立佞武多がこのように行われているのは、岩木川の改修工事や、岩木川河川敷という場所があったからと言っても過言ではないと思います。

石鉢：次に岩木川流域の魅力や現状等について振り返っていただきながら、今後この津軽が発展し、地域の魅力に磨きをかけるために、どういった取り組みが必要なのか、お話をいただきたいと思います。

■知的充足感を得る旅へ

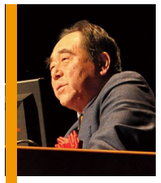
鹿田：2011年から青森朝日放送さんで、「路地裏探偵団がゆく！」という、地域の不思議、謎を解明しようという番組をやっており、これまで80話ほどこの津軽を舞台に色んな謎に挑戦してきました。一度取り上げたことがあるのですが、五所川原周辺に鳥居に鬼が鎮座している神社がたくさんあります。平川、岩木川沿いに約50体ありました。これは魔除けというか、集落に災いが入ってこないようにですとか、その集落の子どもたちがすくすく育ってほしいという願いを込めて、鬼を掲額したと思われます。これも繋いでいくと、面白いツーリズムになるのではないかと思っています。岩木川の弘前エリアを上空から撮影した写真があったのですが、すごくイマジネーションが湧きました。岩木川は弘前城のところから二股に分かれており、そのふたつの川に挟まれている地域があります。私たちが下町と呼んでいる地域ですが、昔の記録を調べると弘前市役所から岩木橋に向かっていく、駒越の通りに造り酒屋が4軒、江戸時代にはこのエリアだけで9軒ぐらい造り酒屋があったそうです。やはり岩木川の水が酒造りにも適していたということが、素人ながらも何となく地形を見ながら分かってきます。またこのエリアには、紺屋町という今も残る町があるのですが、ここは染め物の町です。江戸時代145軒の染め物屋がこの一帯にあったそうで、染め物というのは大量に水を使うし、布をさらす時にも水を使用します。やはり昔の人たちは、こういう地形の中で町割りをして、暮らしていたのだということが、地図から浮かびますね。『ブラタモリ』が人気になって以降、この視点で町や地形を見ていくお客さんがすごく増えています。その地形の痕跡から、昔の人たちの暮らしぶりや先人の生活の知恵を知って、古の時代に思いをはせると言うのでしょうか。物見遊山から「知的充足感を得る旅」に代わってきています。これもまた、新しいツーリズムのひとつであると思います。岩木川の昔の流れから町が作られていく様子というのも、十分資源になると思います。

■伝統技術の継承が大切

福士：2015年にブラジルのサンバカーニバルに参加しました。デ

パネルディスカッション　地域の宝・岩木川を未来へ継承し、未来へ発信する

■ コメンテーター　■ コーディネーター　■ パネリスト


八戸工業大学大学院 教授
佐々木 幹夫（ささき みきお）

東奥日報社
弘前支社編集部長
石鉢 康範（いしのはち やすのり）

特定非営利活動法人
青森県防災士会代表理事
小山内 敬子（おさない けいこ）

弘前路地裏探偵団団長
鹿田 智嵩（しかだ ともかさ）

五所川原市観光物産課
技能技師立佞武多制作者
福士 裕朗（ふくし ひろあき）

弘前大学
農学生命科学部教授
東 信行（あずま のぶゆき）

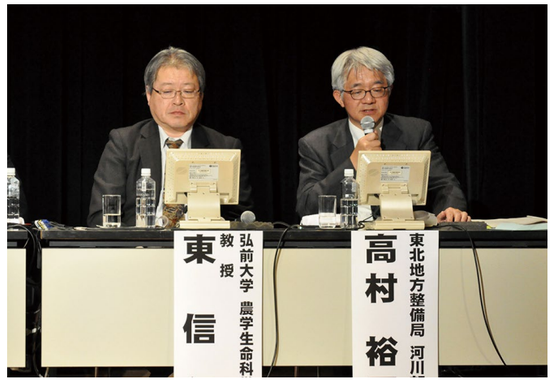
東北地方整備局河川部長
高村 裕平（たかむら ゆうへい）

津軽地域の魅力について

石鉢：岩木川は津軽平野を潤し、地域の人々に愛され、親しまれ、そして多くの恵みをもたらしてきた母なる川です。岩木川での国直轄での本格的な治水事業。この100周年に合わせ、今回は『地域の宝・岩木川を未来へ継承し、未来へ発信する』をテーマに行って参ります。まずは豊かな自然環境や観光資源、文化など岩木川を軸とした流域、津軽の魅力について、語り合っていきたいと思います。

■岩木川流域は自然の豊庫

東：山は水も溜めておいてくれる場所で、特に雪の降る地域の場合は、山には平地よりもはるかに多い雪が冬の間に乗っています。それが春に溶け出して十三湖まで行くわけです。岩木川の最下流に行くとヨシ原が広がっています。これも岩木川の大切な特徴で、ここは全国的に見ても希少種がたくさんいる場所になっています。もうひとつの特徴は、岩木川は非常に運のいいことに十三湖との境目にデルタの名残があって、そこにたくさんの生き物がいます。津軽平野の水田や湖沼には、2～3月をピークにガンやハクチョウが渡ってきます。十三湖周辺や岩木川の河口部に来るのですが、青森県は越冬地に行くための非常に重要な中継地です。ガンの多くは絶滅危惧種です。またヨシ原には、チュウヒというタカの巣があり、タカでは珍しく草原のなかに巣を作ります。獣などに襲われないよう下に水があるヨシ原が必要なのです。次に水の話ですが 、十三湖では毎年2,000トンの自然のシジミを採っています。畳3分の1のエリアに数千個体位いて、しかも十三湖ではアサリサイズくらいになっています。それを支える環境が、十三湖にはあるということです。岩木川にはハゼやサケもおり、伝統的な漁としてヤツメウナギの漁業があります。秋には上流から降りてくるモクズガニを捕り、春は弘前の辺りではシゲタ漁というのがあります。ウグイの産卵期に産卵床を作って捕る方法です。ほかにもアユやサクラマス、ワカサギ、ウグイなど、こういった淡水魚を食べる文化が昔からありました。



石鉢：次は弘前の路地裏探偵団として活動されている鹿田さんに、活動の内容と観光客の方と接して感じておられることをご紹介お願いいたします。

■インフラツーリズムは「用・強・美」と「物語」

鹿田：路地裏探偵団は、今から10年前に結成した観光ガイドチームです。弘前には様々な観光資源がありますが、メジャーな観光地には背を向けて、ひたすら路地裏を突き進む活動をしております。10年間で約5,000人のお客さんを案内しました。その方たちとの触れ合いの中で感じるのは、最近は自分だけの旅を、自分で作るというお客さんがすごく増えてきているということです。ニーズが多様化しているのですが、先日パネリストの皆さんと岩木川流域を歩いてみて、インフラツーリズムだなということを強く感じました。それを楽しむ観光がすごく増えてきています。インフラツーリズムの魅力は「用・強・美」という3つです。「用」は「機能、技

広報活動① 巡回パネル展

2018年5月10日～2018年11月18日　主催

開催日	場所	会場
5月10日～5月22日	五所川原市	立佞武多の館　1階ホール
6月18日～7月2日	弘前市	ヒロロスクエア　3階
7月11日～7月25日	中泊町	中泊町庁舎内
8月8日～8月16日	板柳町	板柳町役場　1階ホール
9月11日～9月21日	西目屋村	津軽ダム資料展示室
10月11日	黒石市	浅瀬石川ダム完成30周年記念式典　会場
11月17日～11月18日	藤崎町	第6回ふじさき秋まつり　会場

5月10日 五所川原市 立佞武多の館 1階ホール

6月18日 弘前市 ヒロロスクエア 3階

7月12日 中泊町庁舎内

8月10日 板柳町役場 1階ホール

9月15日 西目屋村 津軽ダム資料展示室

10月11日 黒石市 浅瀬石川ダム完成30周年記念式典 会場

広報活動② 懸垂幕の掲示

主催

- 五所川原市、つがる市、弘前市、西目屋村、田舎館村
- 青森河川国道事務所、五所川原出張所

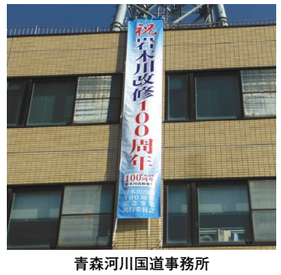
五所川原市役所

つがる市役所

弘前市役所

西目屋村役場

田舎館村役場



青森河川国道事務所

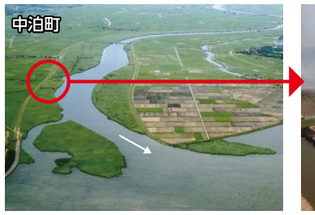
五所川原出張所

岩木川下流部ヨシ原の火入れ

2018年4月21日 共催

岩木川下流部「ヨシ原」は、貴重な生物の生息・繁殖地となっていますが、地域が伝統的に実施してきたヨシの刈り取りや火入れが行われなくなり、ヤナギなどの進入により、環境劣化が進行し、環境改善と保持が喫緊の課題となっています。そこで、今年が岩木川の改修100周年となることを契機に、環境の保全のため、ヨシ原の火入れの復活に向け「岩木川ヨシ原の火入れ検討会」を組織し、現地実験実施を行いました。当日は、火入れ作業関係者など約100名が参加しました。この火入れは、地域の伝統行事（春の風物詩）の復活としても期待されます。

沢山の関係者や見学の方々



4月21日 実施状況

4月21日 実施状況

4月21日 実施状況

浅瀬石川ダム管理30周年記念シンポジウム

2018年10月11日 共催

浅瀬石川ダムが完成してから今年で30周年の節目の年を迎えることを記念し、黒石市の津軽伝承工芸館において、シンポジウムを開催しました。平日にもかかわらず、会場を埋め尽くすほどの約200名の方が来場しました。

関連行事	
5月12日～5月13日	●西目屋村の水陸両用バスの浅瀬石川ダム虹の湖運航（水陸両用バス津軽白神湖in虹の湖） ●浅瀬石川ダムクレストゲート試験放流&ライトアップ
7月29日	●森と湖に親しむ旬間ダム湖ふれあいデー（虹の湖公園）

浅瀬石川ダム水陸両用バス

浅瀬石川ダムクレスト試験放流

浅瀬石川ダムライトアップ

ダム湖ふれあいデー（カヌー巡視体験）

ダム湖ふれあいデー（堤体内見学）

浅瀬石川ダム管理30周年記念シンポジウム

岩木川クリーンアップ大作戦

2018年6月～ 協力

岩木川流域全川において統一的な清掃活動を展開しました。参加団体は20団体、参加人数はのべ617名におよびました。今回の岩木川100周年を契機に今後も岩木川流域一体の環境美化活動を継続していく予定です。

板柳町老人クラブ連合会の皆さん

（株）みちのくクボタの皆さん

日本振興（株）東北支店の皆さん

現在の取り組み紹介　岩木川河川整備の状況

青森河川国道事務所長
巖倉（いわくら） 啓子（けいこ）

岩木川の改修事業は、100年前の大正7年に国の直轄事業として、水戸口突堤の建設から始まりました。当時の五所川原市長が会長となり、明治43年に岩木川改修期成同盟会を設立して請願活動をしていただき、改修が着手されたという歴史があります。水戸口突堤は昭和21年に完成し、下流部の広範囲に発生していた河口閉塞による水位上昇・排水不良等の被害が解消されました。

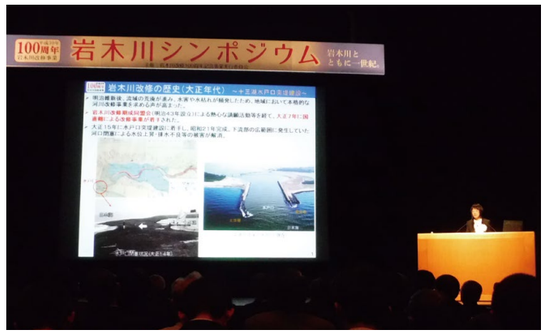
水戸口突堤が完成しても、大雨による洪水・浸水被害が発生したため、昭和48年に工事実施基本計画を改定し、上流ダム群を計画。昭和63年に浅瀬石川ダム、平成28年に津軽ダムが完成しました。浅瀬石川ダムが5,300万㎥、津軽ダムは1億4,000万㎥という貯水量を持つダムにより、治水安全度が大幅に上がりました。平成25年には台風18号で、特に三世寺の無堤部地区を中心に大きな被害が発生しましたが、平成29年に堤防の整備が完成しました。

河川施設整備は進みましたが、近年の災害でもありますように、想定を超える大雨が降ることもあります。そこで堤防の狭いところを拡幅する工事や、川の中を広げる河道掘削も順次行っております。また、瀬と淵の再生による魚類生息環境の改善を行い、川の中の生態系を豊かにすることを目指しています。

このほか、川の樹木の伐採も公募をかけ、伐採者にその樹木を持ち帰って利用していただくことにより、伐採木の有効活用を図り、地域の方々や市町村の防災担当者と協力してのハザードマップ作成や高齢者施設の避難計画策定のための勉強会を開催し、水防災意識社会の再構築を目指しています。

また、施設の役割や重要性を理解していただくため、津軽白神湖の水陸両用バスや季節ごとの地域イベント開催に合わせたダムライトアップ、様々な見学会等を開催しています。

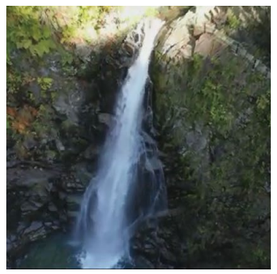
地域と一体となって、岩木川改修の歴史をご理解いただきながら、地域を愛し、かつ洪水の被害に対して意識を高めていく取り組みを進めています。

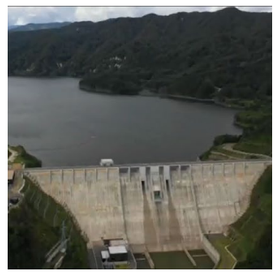


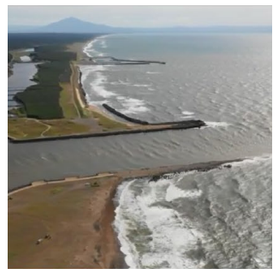
岩木川改修100周年記念ビデオ上映

青森河川国道事務所ドローン活用検討会アドバイザーの請川博一氏が総合プロデュースしたビデオを上映。

※請川氏はドローン空撮の第一人者としてブラタモリなどのテレビ番組やCMの空撮を手がけており、火口など人の立ち入り出来ない場所の調査などでも活躍してます。







基調講演　岩木川の歴史と改修の歩み

八戸工業大学大学院 教授
佐々木（ささき） 幹夫（みきお）

岩木川は洪水による浸食作用と土砂の運搬・堆積作用により形成されてきました。

時代が進み、この岩木川が運んだ土砂が湾や海を埋めて、最初は丼型の底の深い湖だった十三湖も土砂で埋まり皿のような形になりました。その十三湖の成り立ちを湖底の堆積物の微生物の遺体を調べると、海水で生きた微生物なのか、淡水で生きていたのか、あるいは海水と淡水が混ざったところで生きていた微生物なのかが分かります。この調査で弘前大学の小岩直人先生が大発見をしました。

一般的に言われているのは2万年前は氷河期で、8,000年前になると海面が上昇して湾ができてきます。約6,000年前が縄文時代で、6メートルくらい水位が上がったところもありました。そうすると五所川原湾が、ずっと平野部の中に入っていきました。4,000年前から1,000年前ぐらいまでは、砂州が形成されて海と湖が分けられたのか、とても安定した淡水の時代でした。それが1,000年ぐらい前に、誰かが突如として海と湖の間にあった砂州を切りました。その結果海水が入ってきて、海水と淡水が混ざったところで生きている微生物が発見された。これが小岩先生の発見です。

1,000年前に誰が切ったのか、誰がここにいたのか、人と岩木川の関わりについて調べると、この土地は安東氏が支配していました。1170年頃十三湖に入って、中世の国際港湾都市十三湊を築いたことになっており、小岩先生が出した結果と100年違っています。長尾角左衛門さんの『岩木川物語』という本の中に、1087年に津波があってこの地域が被害を受けたという記録があります。ということは、この頃もうすでに安東氏がここにいたと考えると、小岩先生の科学的な結果と合ってきます。ですから、この安東氏は1170年よりも前に、この十三湖や岩木川を支配したのではないかと考えられます。

その後は弘前藩の支配となり、土地利用を積極的に進めていきます。水戸口閉塞を何とかしようと水戸口奉行を設けて、岩木川の改修と水戸口の改修のふたつを手掛けています。ですが藩政時代はうまくいかず、青森県の時代になっても岩木川の氾濫と水戸口の閉塞は防げず、国に頼んでいます。

川の近くまで新田開発が進むと、洪水は田畑を破壊して、人を奪っていく怖い存在になったため、どうしても治水が必要になりました。それが河川改修となったわけです。岩木川にはふたつの洪水があって、ひとつは大雨が降った時の岩木川の氾濫。もうひとつは岩木川の河口閉塞による下流部の湛水災害です。

十三湖では、水戸口の閉塞で水害が発生しており、250年間で15の水戸口を設置しましたが、14が失敗しました。青森県の時代になり、国に岩木川治水の請願書を出しました。その時の請願書に西津軽郡と北津軽郡で約140平方キロメートル、湛水災害があったという記録があります。

1918年に岩木川改修事務所が設置され、1926年から新しい水戸口を作り始め、1946年に完成しました。それが完成する前の1930年に最後の閉塞が起きていますが、それ以降は起きていません。250年すべて失敗してきましたが、国が作った今の水戸口だけが成功したのです。その水戸口を設計した人が、長濱時雄さんです。五所川原の改修事務所に赴任して、5年間波を見たり、砂の動きを調査したり、7年後にやっと水戸口突堤の工事を始めました。

「港湾」という雑誌に彼の手記が載っているのですが、竹内俊吉知事と面会した際、知事から今の水戸口を広げて避難港にしたいがどう思うか聞かれて、長濱さんは「今の水戸口が閉塞しないのは、海からのエネルギーと、川からのエネルギーのバランス取れているからだ」と答えたと書いています。今から30年前に日本海と十三湖の水位を一昼夜観測しました。その結果、湖の水位は、海の水位に約4時間遅れを取りながら変動していました。この遅れがあの水戸口の幅と長さと粗度によって作り出されているのであり、この遅れがないと、順流も逆流も、波が水戸口の中に砂を運んでも、それを吐き出す力がないのです。これが海のエネルギーと川のエネルギーです。

完成から72年経過して突堤は導流堤としての機能を維持しており、水戸口は1度も閉塞することはありませんでした。ところが、最近地形の変化があり、閉塞の危険がみられます。導流堤のブロックに変状がみられたため、対策が必要です。歴史上成功した水戸口は現水戸口だけです。湛水災害に苦しんできた津軽の人々を開放し、津軽平野に安全と安心をもたらし、流域に住む40万を越える住民に限りない恵みを与え、津軽平野発展の礎となっています。

河川技術講演会　2018年8月4日 協力

「あおもりの川を愛する会」、「NPO法人岩木川と地域づくりを考える会」の主催により、河川文化講演会の一環として、河川技術講演会を開催しました。河川行政への多様化するニーズに応えるため、統合的な技術者の育成を目的としており、当日は多くの方々が聴講しました。

歓迎挨拶 五所川原市 佐々木孝昌市長

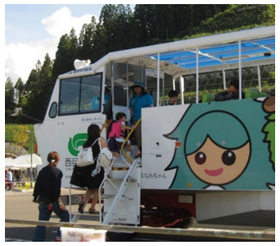
講演 東北地方整備局 高村裕平 河川部長

講演 参議院議員 足立敏之氏

津軽白神湖まつり　2018年9月15日 協力

岩木川改修100周年・白神山地世界自然遺産登録25周年の節目の年として、西目屋村主催で開催。当日は絶好の青空の下、約1,500名もの来場者が、『カヌー・SUP体験』、『水陸両用バス』などを体験。また、『岩木川&白神山地クイズ大会』や関西目屋村長、NPO法人「岩木川と地域づくりを考える会」佐々木会長、歌手の吉幾三さんを交えての岩木川や津軽ダムに関わる『トークショー』など多彩なイベントで盛り上がりました。

津軽白神湖でのカヌー体験


水陸両用バス

津軽白神湖まつり

岩木川改修100周年記念ウォーキングin五所川原　2018年10月14日 協力

青森県ノルディック・ウォーク連盟において、五所川原市周辺に建立された岩木川の治水に関する石碑を歩きながら学んで知ってもらい、治水事業への理解を深めてもらおうと、ウォーキングイベントを開催しました。佐々木五所川原市長の開会挨拶の後、晴天に恵まれた爽やかな秋空のもと、約70名の方が参加、汗を流しました。

岩木川堤防でのウォーキングの様子

昭和10年洪水当時の新聞記事を確認

岩木川シンポジウム

「地域の宝・岩木川を未来へ継承し、未来へ発信する」をテーマに岩木川シンポジウムを開催

岩木川改修事業が100周年という節目に、事業の足跡と水害の歴史を振り返るとともに、地域の宝である岩木川を未来へ継承し、未来へ発信するために何が必要かを考える岩木川シンポジウムを12月1日(土)、五所川原市ふるさと交流圏民センター(オルテンシア)において、岩木川改修100周年記念事業実行委員会会長 佐々木五所川原市長はじめ約400名(満席)が参加し開催しました。

※当日は、大正7年12月1日に「内務省秋田土木出張所岩木川改修事務所」が開設し、国直轄による本格的な改修事業が始まった日から、ちょうど100年目となります。

シンポジウムでは八戸工業大学大学院 佐々木教授が「岩木川の歴史と改修の歩み」と題して基調講演を行い、十三湖の水戸口突堤が岩木川の治水と津軽平野の発展の礎となった貴重な土木遺産であることなどを紹介しました。

記念ビデオ「現在を魅る津軽の郷"岩木川"」で岩木川の魅力を映し出した後、巖倉青森河川国道事務所長からは、現在の取り組みとして岩木川河川整備状況を紹介しました。

出席者

開会挨拶

佐々木(ささき) 孝昌(たかまさ)
五所川原市長

岩木川は流域に恵みを与える一方、洪水になると大きな被害をもたらしてきました。しかしながら、十三湖の水戸口突堤や築堤工事、さらには浅瀬石川ダム、津軽ダムの完成など、長年に亘る治水対策により、洪水などの被害は減少しております。岩木川の歴史とその改修の歩みを再認識していただき、岩木川流域のさらなる発展のため取り組んでいくことを決意し、末永く地域の宝として愛され、親しまれることを祈念いたします。

開会挨拶

髙田(たかだ) 昌行(まさゆき)
東北地方整備局長

昨今のように自然災害が全国的に頻発化する中で、施設では防ぎきれない大洪水は必ず発生すると認識し、人命を最優先に行政はもとより、自助、共助も含めたソフト・ハード一体となった総合的な防災対策を進めていくことが重要です。地域資源を生かした観光振興には、道路などの交通インフラを充実させ、地域の活性化に繋げることが不可欠。交通インフラで地域を繋ぎ、堤防などの防災インフラで地域を守ることが重要です。

来賓挨拶

青山(あおやま) 祐治(ゆうじ)
青森県副知事

平成28年度には国、県および関係市町村からなる岩木川等大規模災害に備えた減災対策協議会が設置され、社会全体で洪水に備えるため、ハード・ソフト対策を一体的、総合的、計画的に推進しているところです。また、県では「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」をとりまとめたところであり、安全・安心な県土づくりを主要施策として掲げ、自然災害から県民の命と暮らしを守るために取り組んでまいります。

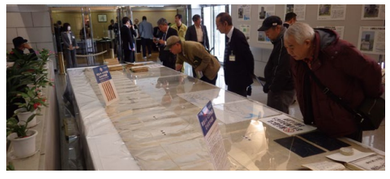
閉会挨拶

櫻田(さくらだ) 宏(ひろし)
弘前市長

この津軽地域、岩木川からたくさんの恩恵を受けています。岩木川改修100周年という節目の年に、先人が築いた歴史、苦難の歴史、利水の道、様々なことを振り返りながら、これからの100年に向けて何をすべきか考える機会になったのではないかと思います。これからの地域づくりには広域連携が非常に重要です。各市町村の特性を生かし、お互いが支え合いながらその強みを出して、継続できる地域づくりを行って参りましょう。

岩木川シンポジウム

プログラム	
時間	次第／出演
12:30	開場・受付
13:10	オープニングアトラクション『津軽三味線』 演奏／五所川原第一高等学校 津軽三味線部
13:30	開　会
13:40	基調講演『岩木川の歴史と改修の歩み』 佐々木 幹夫氏 八戸工業大学大学院 教授
14:20	岩木川改修100周年記念ビデオ上映『現在(いま)を魅(み)る津軽の郷(さと)"岩木川"』 総合プロデュース／青森河川国道事務所ドローン活用検討会　アドバイザー：請川 博一氏 挿入歌／りんご娘「JONKARA(じょんから)」
14:30	現在の取り組み紹介『岩木川河川整備の状況』 巖倉 啓子青森河川国道事務所
14:55	パネルディスカッション テーマ『地域の宝・岩木川を未来へ継承し、未来へ発信する』 コーディネーター 東奥日報社弘前支社編集部長石鉢 康範 パネリスト 特定非営利活動法人青森県防災士会代表理事小山内 敬子　弘前路地裏探偵団団長鹿田 智嵩　五所川原市観光物産課技能技師立佞武多制作者福士 裕朗　弘前大学農学生命科学部教授東 信行　東北地方整備局河川部長高村 裕平
16:30	閉　会

パネル展

明治150年 特別展示 明治44・45年岩木川平面実測図 ～明治の歩みをつなぐ、つたえる～